

玉川上水・野の花だより No. 3 2

400年の雑木林（明治神宮御苑：井伊家下屋敷に起源）

中央大学研究開発機構・機構教授 東京大学名誉教授

石川 幹子

2026年 7月26日

野の花だより No. 30, 31 では、武蔵野の雑木林の二つの事例を御紹介いたしました。昭和天皇の発意でつくられた「二の丸雑木林」は、玉川上水緑道と同じく昭和58～60年に整備され、微地形のデザインにより様ざまのエコトープが生み出され、四季折々の野の花の咲く森が、訪れる人々を迎えてくれます。

大手町の再開発で生み出された雑木林は、潜在自然植生に基づく東京都の「生物多様性ガイドライン」に準拠し、小川も導入した都市の森となっています。

「武蔵野の雑木林」の事例を学んでいるのは、今回の整備が、「玉川上水の歴史や文化遺産の保全・継承」し、「生物多様性豊かな武蔵野の杜」を創り出すことを基本に据えているからにほかなりません。そのためには、優れた事例を謙虚に学ぶことが原点となります。真の力強いデザインは、伝統と歴史の深い理解の中から、それを打ち破る「革新」として誕生します。

この視座にたち、この間、日本イコモスと渋谷区は、玉川上水に隣接する明治神宮内苑にある、井伊家下屋敷に起源を有する「武蔵野の雑木林」の研究を続けてまいりました。写真1は秋の風景、写真2は猛暑の中の雑木林の風景です。玉川上水緑道整備に繋がる深い叡智が、ここに眠っています。

今回は、「四百年の雑木林」の核心を御紹介します。



写真1 明治神宮・御苑（秋）・学習会

2025年11月29日

（渋谷区土木部と日本イコモス）



写真2 明治神宮・御苑（夏）

2026年7月25日

（写真1と、ほぼ同じ場所）

1. 400 年の杜と 100 年の杜

一般に、明治神宮内苑は、不毛の荒地に創り出された「100 年の杜」とされています。「400 年の雑木林」というタイトルに、違和感を抱かれる方々が、いらっしゃると思います。この疑問にお答えすることは極めて重要です。

明治神宮は大正 2 年 3 月に衆議院において建設を行うことが決議され、同年 12 月に神宮奉祀調査会がたちあがり、候補地の選定が開始されました。

調査会会長は、原敬ついで大隈重信、委員は徳川家達、澁澤榮一、福羽逸人、阪谷芳郎、井上友一、伊東忠太、川瀬善太郎、本多静六等でした。集中的審議が行われ、数ある候補地（陸軍戸山学校・白金火薬庫・国府台・宝登山・富士山等）の中から、当時、南豊島御料地（元・井伊家下屋敷 面積・約 60 ha）であった現在の場所が選定されました。選定の理由は、原文を引用します。

「東京近郊において最も広濶幽邃の地にして土地に高低変化あり、而も御苑林泉の美自ら神域たるに適し、その位置市街に接し、交通の便ある上、付近に民家少なく塵芥を隔てて、全別天地たるの観あり。」¹⁾

すなわち、広々としており、幽邃であり、しかも「林泉」の美を備えた場所であると述べられています。「林泉」とは、多くの人々に開かれた「庭」を意味し、「都林泉名所図会」に描かれたように、今日の公園に相当するものです。一般に大名庭園は閉鎖的なものだったと考えられていますが、そうではありません。東京の御殿山、飛鳥山、井伊家下屋敷（図 1）、仙台の榴ヶ岡、白河の南湖等は、身分の違いを超えた共楽の地、「林泉」でした。

明治神宮の地が、「不毛の地」ではなかったことが、おわかりいただけると思います。それでは、井伊家下屋敷は、どのようなものだったのでしょうか。今日に継承されている 400 年の杜の原点となります。

（1）井伊家下屋敷から明治維新をへて、皇室苑地（南豊島御料地）まで

図 2 は、明治神宮が所蔵しておられる井伊家下屋敷の古図です（千田ヶ谷御屋敷と記載されています（地名は古図の名称。図中の文字は、筆者が書き添えたもの））。

南端に現在の南池である「御泉水」があり、右手には代々木の地の由来となった巨大なモミノキの木が、当時の古図としてはめずらしくイラスト風に描かれています（図 2 赤丸で表示）。御泉水は林泉の構成上、最も重要なもので不老不死の仙人が住むユートピア思想の源流となるものです。御泉水の東部に御殿と萩の御茶屋があり、前面は芝生となっています。雑木林と記載された明るい杜が連続しており、御泉水の西南部には、向御殿と一面芝生で覆われた大瓜山があ

りました。谷津田が細長く貫入しており、当時は水田として使われていました。最奥部の清正井の背後は、現在の御社殿の杜で、図面には「惣名裏山」、樅檜林（モミカシリン）と記載されており、不毛の原野ではなかったことがわかります。現在の宝物殿前の芝生広場のエリア、及び現在の苗圃のエリアは、広大な畑となっており、果樹園として柿栗林もみられ、燃料用とみられる雑木、松林が分布していることがわかります。現在、このエリアには内苑で唯一の竹林があり、戦前までには、皇室用の筍（タケノコ）が献上されていたと記録されており、武蔵野の杜の四季折々の風物が、土地利用の中から読み取ることができます。

井伊家下屋敷については、江戸期の紀行文として知られている十方庵大浄敬巡（じっぽうあんたいじょうけいじゅん）の『遊歴雑記』（文化12年）には、次のように記されています。

「此屋敷八町四方に過たり、坪数拾八萬四千二百八十余坪といえり、廣き事推察すべし、此のやしき内には今稀代の大樹の樅の木（モミノキ）あり。枝四方はびこる事五十餘間（約九十メートル）。神代よりの古木とやいはん、如何ばかりの年代を経たりけん。此樹の根の空の中に水二、三升 づつ常にたたえたれば、樅の樹を見物にまいる徒は、竹筒にくみ入れて帰宅す。その水清潔にして味ひ少し渋く辛きが如し。」²⁾

屋敷には、巨大なモミノの古木があり、この根元の空（うろ）に、いつも水がたたえてあり、人びとは、竹筒に汲み入れ帰宅したと記されています。さらに、

「梅園有さくらの林あり。往古の松並木も今現在して馬場の如し。また、萩見の亭、朝顔の楼、それぞれに二階に作れる亭あり、三階に作る高楼あり、或いは扇子形に作れる三角の茶亭あり、取分萩の頃は実に廣野に遊ぶが如く、野あり山あり百草生じ百菓熟す。波濤に似たる山々には、もろもろの菌生じて茸狩するに佳興あり、左はいえ外々の別荘のごとく泉水を構え樹を植込石をならべて縷々模様をほどこし處ひとつもなし。」³⁾

当時の、武蔵野の風情、なだらかな起伏の丘が続いている様子が手に取るように描かれており、梅・桜・萩・キノコ狩り等、多くの人々が訪れていたことがわかります。このように井伊家下屋敷は、モミノキの見物や武蔵野の四季折々の自然を楽しむことのできる「共楽の地」、すなわち今日の「公園」のようなものであったことがわかります。明治期になり、この林泉は、皇室苑地となりますが、江戸期から継承されてきた風景を伝えるものが、明治神宮造営の前に作成された「南豊島御用地図」（図3、大正4年作成）です。

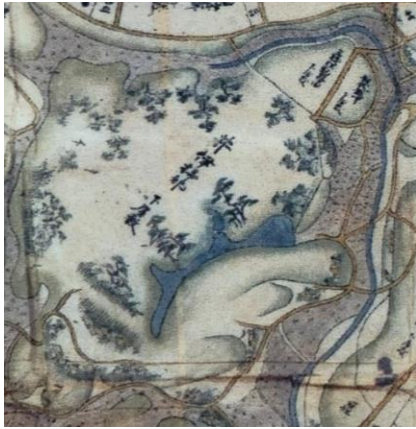


図1 井伊掃部 下屋敷



図2 千田ヶ谷御屋敷



図3 南豊島御料地（大正4年）

写真3は、南地から対岸を望んだもので、池畔の松は、井伊家由来のもの、背後に明るい雑木林が連なっていることがわかります。



写真3 南池から御苑をのぞむ



写真4 菖蒲田



写真5 惣名裏山

(2) 将来計画（マスタープラン）に基づく杜づくり

明治神宮内苑の造営にあたっては、将来計画図が作成されました。今日のマスタープランに相当します（図4）。これを踏まえて、場の特性に応じた施工計画として「林苑事業区」（図5）が定められ、杜づくりがおこなわれました。百年の杜計画（図6）は、御社殿を取り囲む第一区です（写真6）。その背後には、人々の憩いの場としての、イギリス自然風景式庭園の様式を規範とした「代々木野自然風景式庭園」（整備前：写真7、現在の芝生広場：写真8）が創り出されました（第3区）。井伊家以来の雑木林である御苑は、第7区で手厚く保全されました。



図4 明治神宮境内平面図

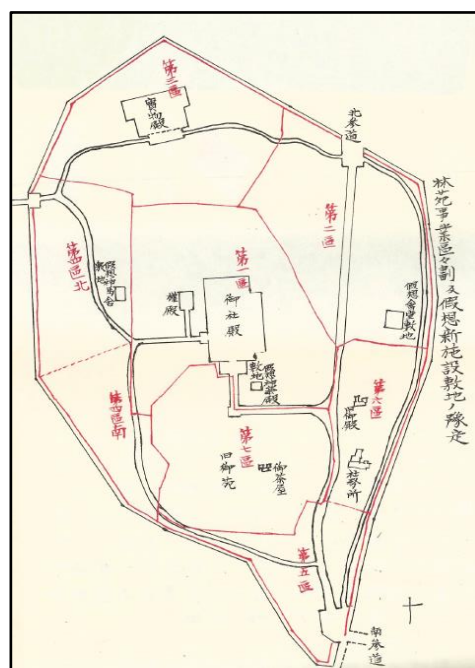


図5 林苑事業区

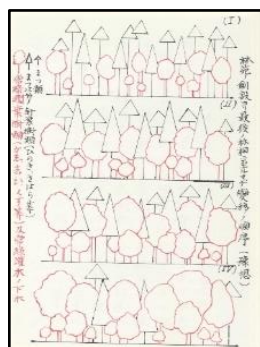


図6 林苑変移の順序



写真6 クスノキスダジイ林

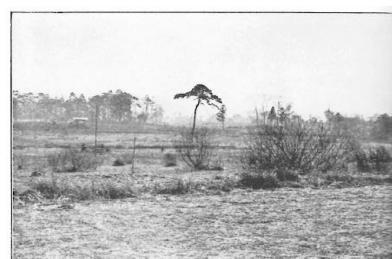


写真7 代々木野（整備前）



写真8 代々木野自然風景式庭園

2. 明治神宮内苑の「御苑」エリアにおける雑木林の特色

図7は、鎮座百年を記念して実施された『第二次明治神宮境内総合調査報告書』（平成25年9月）に掲載されている「現存植生図」です。森林群落は10種類に分類されており、御社殿や参道を取り囲む常緑広葉樹林（クスノキースダジイ群落、図面で濃い緑色）は約29.1ha、御苑を中心とする落葉広葉樹林（イヌシデーコナラ群落、ケヤキーシラカシ群落、図面で黄緑色）は約17.8ha、この他にモウソウチク林0.3haとなっています。

玉川上水緑道が目標とする落葉広葉樹林の内容を、詳しくみていきましょう。



図7 明治神宮内苑現存植生図（平成25年）

(1) 落葉広葉樹林（イヌシデーコナラ群落、ケヤキーシラカシ群落）

御苑の南池を取り囲む一体は、イヌシデーコナラが優先する落葉広葉樹林で、ケヤキやシラカシが混在します。1980 年に行われた『明治神宮境内総合調査』でも、同様に分類されています。上層木が落葉広葉樹であるため、林内は比較的明るく階層性があり、亜高木には、イロハモミジ、コブシ、ウワミズザクラ、ミズキ、低木層には、アオキ、ムラサキシキブ、ヒサカキ、地被には、ジャノヒゲ、キズタ、テイカカズラ、ヤブコウジ等が分布します（図8）。

井伊家より 400 年、この雑木林が継承されてきた理由は、「萌芽更新」といって、定期的に伐採が行われ（40～50 年のサイクル）、切り株から新しい若木の成長を促し、森の更新が行われてきたことによります。しかし、近年は管理が放置され（写真9）、また、萌芽更新が行われなくなったことにより、落葉広葉樹林は大きな変貌を遂げています。更に、2020 年代にはいり、全国的に猛威を振っているカシノナガキクイムシが媒介する「ナラ枯れ」により、御苑の杜も甚大な被害を受けています（写真10）。



Fig. 15. イヌシデーコナラ群落断面模式

Vegetationsprofil der *Carpinus tschonoskii*-*Quercus serrata*-Gesellschaft.

1 シロダモ	<i>Neolitsea sericea</i>	9 ナツツタ	<i>Parthenocissus tricuspidata</i>
2 イヌシデー	<i>Carpinus tschonoskii</i>	10 ムラサキシキブ	<i>Callicarpa japonica</i>
3 アオキ	<i>Aucuba japonica</i>	11 キツタ	<i>Hedera rhombea</i>
4 ジャノヒゲ	<i>Ophiopogon japonicus</i>	12 シュロ	<i>Trachycarpus fortunei</i>
5 イロハモミジ	<i>Acer palmatum</i>	13 ヒサカキ	<i>Eurya japonica</i>
6 アズマネザサ	<i>Pleioblastus chino</i>	14 コブシ	<i>Magnolia kobus</i>
7 エノキ	<i>Celtis sinensis</i> var. <i>japonica</i>	15 ミズキ	<i>Cornus controversa</i>
8 コナラ	<i>Quercus serrata</i>	16 ウワミズザクラ	<i>Prunus grayana</i>

図8 イヌシデーコナラ群落

出所：明治神宮社務所（1980）『明治神宮境内総合調査報告書』



写真 9 管理が放置された樹林地
2026 年 7 月 25 日



写真 10 ナラ枯れにより被害を受けた樹林地
(清正井の背後、2024 年 5 月 2 日)

(2) 玉川上水緑道整備が参考にすべき落葉広葉樹林

400 年の雑木林で、良好に維持継承されてきているエリアが、菖蒲田（元・水田）から緩やかな斜面へと連なる落葉広葉樹林です（写真 1、2、11）。このエリアは、二の丸雑木林で御紹介した「落葉広葉樹林及び林縁のエコトープ」に相当するもので、園路に沿って日当たりのよい草地があり、ムラサキシキブ、ヤマブキ等の灌木、イロハモミジの亜高木、そして背後のコナラやイヌシデの林に連なっています。写真 11 の中央の草地には、早春には、森の妖精であるカタクリが咲き、エビネ、シュンランもみられます（写真 12）。

このエコトープの幅員は、25～30m ほどであり、四季折々の野の花の咲く玉川上水緑道の整備に向けて、参考にすることが可能です。



写真 11 明治神宮御苑における落葉広葉樹林
・林縁のエコトープ 2026 年 7 月 25 日



写真 12 落葉広葉樹林の林床に咲く
カタクリ 2024 年 3 月 25 日

（３）渋谷川流域圏と水循環——「春の小川」への連携

最後に示す図 9 は、渋谷川流域圏における玉川上水と明治神宮内苑の位置です。都市化により、春の小川（河骨川）、宇田川、渋谷川上流などは、ことごとく姿を消していきましたが、内苑には、かろうじて水脈が生きており、玉川上水にも半世紀振りに清流が戻ってくることとなりました。玉川上水緑道整備にあたっては、水循環の回復に向けた将来ヴィジョンが必須であると考えます。

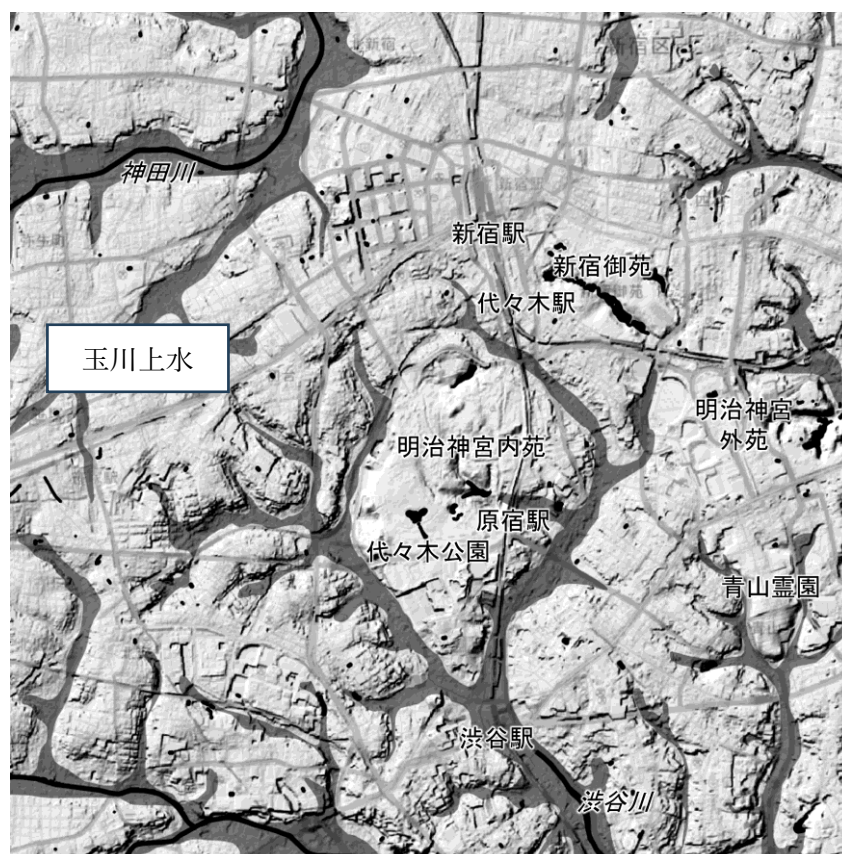


図 9 「渋谷川流域圏」における玉川上水及び明治神宮内苑

参考文献

- 1) 内務省神社局（1930）『明治神宮造営誌』 35 頁
- 2) 3) 十方庵大浄敬巡（1815）『遊歴雑記』 「代々木下屋敷井伊家の大樅（おおもみ）」
- 図 1～4 内務省神社局（1930）『明治神宮造営誌』
- 図 5, 6 本郷高德 『林苑計画書』
- 図 7 明治神宮社務所（2013）『鎮座百年記念第二次明治神宮境内総合調査報告書』
- 図 8 明治神宮社務所（1980）『明治神宮境内総合調査報告書』
- 図 9 石川幹子（2025）『緑地と文化』 岩波書店
- 写真 3, 4, 5, 7 内務省神社局（1930）『明治神宮造営誌』